



奥向女中が仕事として表方へ

「表御^め切」は、正室や女性家族・子どもに対してだけでなく、江戸城や親戚大名から女使（奥向女中）が遣わされた時にも行われました。

常盤橋上屋敷の仮住居に移った浅姫は、その年（文政12年）7月に於義丸（1829-1835）を出産しました。このため着帯や於義丸の御七夜、色直、箸揃と儀式が続きましたが、その際に常盤橋上屋敷では大奥が手狭であるとの理由で江戸城大奥からの女使の祝儀を「表御居間御^め切」にして受けていました。

また奥向女中の長である年寄（老女）やそれに準じる上級の女中、引退し剃髪した比丘尼らが奥向表方に入る場合、参勤交代時の奥向女中一統の藩主へのお目見えなどでも「表御^め切」が行われていました。

